

〔エッセイ〕

マグパイ便り

— 2019年春夏イギリス・ヨークシャー滞在記 —

村上純一

早春の北イングランド、入居したアパートの窓から見える街路樹に、2羽の鳥が巣作りをしていた。鳩ほどの大きさで、白黒模様の鳥だった。調べてみると、マグパイ（日本名でカササギ）であることが分かった。木の方は、樅の木的一种だったと思う。その木の上部に、2羽のマグパイが頻繁に外から小枝を運んできていた。それは後に、みるみる逆円錐状の形になっていった。マグパイの名は、北東イングランドの港町ウィットビー Whitby にある「マグパイ・カフェ」で知ってはいた。フィッシュ・アンド・チップスがおいしい店として有名で、ランチ・タイムには行列ができる。マグパイというのは、イギリスでは最もありふれた鳥のひとつだという。言い伝えがあり、2羽のマグパイを見かけたら喜びをもたらすが、1羽であれば悲しみをもたらすので、敬礼してさよならを告げる *salute magpie* のだそうだ。

(2羽のマグパイ)



住み始めた部屋は、4 階建てのアパートの最上階であった。エレベータ (イギリス英語ではリフト lift) がなかったので、階段の上り下りは良い運動であったが、窓からの眺めは良かった。広々と一面に芝が張り詰められたサヴィル・パーク Savile Park に面しており、街路樹がその周りに植えられている。公園の先には 19 世紀に立てられたウェインハウス・タワー Wainhouse Tower が見えた。ハリファクス Halifax で最も高い塔である。公園の右手には英国国教会の塔が見え、寝室の窓の下は、保育園の庭で遊ぶ幼児の姿が見えた。

ハリファクスという街に住むというのは、予定外であった。大学のあるハダースフィールド Huddersfield までバスで 1 時間ほどかかる隣町である。カウンシル council と呼ばれる行政区域も異なり、ハリファクスはカルダーデール Calderdale の中心地である。ハリファクスに住むことになった理由は、ハダースフィールドで半年借りられる適当なアパートが見つからなかったからである。幸い、アパートの出口すぐのところにバス停があり、タウンまで 10 分ほどで行ける。タウンのバスステーションからは、頻繁にハダースフィールド行きのバスが出ている。大都市マンチェスター Manchester、リーズ Leeds やブラッドフォード Bradford へも、鉄道で 1 時間ほどで行くことができる。不便ではない場所であった。

(ピース・ホールにて、筆者)



以前はハリファクスについて寂れかけた街という印象を持っていた。今回住み始めて気づいたのは、再開発が進み、街が活気を取り戻している様子であった。18世紀末に建てられた毛織物市場のピース・ホール Piece Hall は、10年前は閑散としていたが、今は洒落たレストランや雑貨店などによって賑わいを取り戻していた。

3月下旬からイギリス生活を始めたのは、3月29日に予定されていたブレグジット Brexit つまりイギリスのEU離脱の際に予想された混乱に巻き込まれなかったからだ。ところがそれは10月31日に延期された。そしてこの原稿を書いている今、2020年1月末に延期されようとしている。ハダズフィールド大学の知り合いの中で、ブレグジットに賛成だという人は一人もいなかった。もう一つ彼らが共通して言っていたのは、「ブレグジットが今後どうなるか全く分からない」ということであった。ヨーロッパからの学生を増やしたいイギリスの各大学にとって、ブレグジットによるメリットは何もないであろう。スーパーマーケットにある多くの食料品がEU各国からの輸入品であり、そのために価格も安く抑えられているはずである。ブレグジットが行われれば、かなりの物価高になるのではないか。しかし滞在中に感じられたのは、いまや賛成か反対かよりも、「どうにかしてほしい」という、人々の「ブレグジット疲れ」であった。

(ソワービー・ブリッジのカナル)



3 月から 4 月にかけては比較的天気良く暖かい日が続いた。以前からカナル沿いを歩くのが好きなので、さっそく近郊のソワービー・ブリッジ Sowarby Bridge からヘブデン・ブリッジ Hebden Bridge まで散歩をした。10 キロメートルほどのカナル・ウォークであるが、ゆったりとした景色のせいか、短く感じた。年に 2 回開放されるというウェインハウス・タワーにも登ってみた。遠くに大きな煙が見えた。20 キロほど南にあるハダーズフィールド郊外のマーズデン・ムーア Marsden Moor の火災がまだ収まっておらず、その煙がモクモクと立っていた。この火災は 2 月に予期せぬ暖かい気候のせいで生じたものであると聞いた。

4 月中旬、ニュースでパリのノートルダム大聖堂の火災を知った。ノートルダム大聖堂はずっと以前に一度だけ訪れたことがあり、セヌ川のほとりに建つ壮麗な建物を思い出した。また哲学者森有正さんのことも思い起こされた。もし彼が生きていたなら、どう感じただろうかと思ひもした。

暖かい年かと思っていたが、5 月に入ると雨の日が増え、寒々しい日に変わった。きっと 6 月になれば暖かく天気の良い日が来るだろうと期待していたが、反対に悪化の一途をたどった。6 月はほとんど毎日雨で、最高気温が 15 度、最低気温が 6 度ぐらいの日が続いて、冬に逆戻りしたかのようであった。雨の日、石畳の道はアスファルトの道より滑りやすい。それで車道の方を歩いていたら、通りすがりの婦人から声を掛けられた。彼女が言うには、歩道の方は滑りやすい。以前、横の道から車が入ってきたので、止まった瞬間に転倒してしまった。足を骨折して、保険会社に相談したのだけど、自分で転んだということで保険金が下りなかった。気をつけてね、ということであった。イギリス人でもこの道は歩きにくいのだと知った。

ハダーズフィールド大学では、非常勤講師用の研究室の使用が許された。授業のための控え室ではなく、共同ではあるが研究室である。そこで他の訪問研究員や非常勤講師の方と研究上の話をするこももあった。社会学と政治学を中心とする学科であったので、研究上の接点が必要どころにはあり、話をするのは楽しかった。PHD を取りに来ているのかと聞かれることがあったが、自分はもう 60 歳に近いのでそれはいらぬと思う、と答えた。その年齢を聞いて驚いた、と言われたが、若く見えたと喜ぶべきか、幼く見えたと嘆くべきか、どちらとも言えないような奇妙な感じがした。

5 月下旬、雨天と寒さに辟易して、日差しを求めてポルトガルのリスボン Lisboa に行くことにした。リスボンで立ち寄った歴史博物館に広げられていた世界史年表では、日本に関する記載が多いことに気づいた。彼らが日本を「発見」し、その文化を破壊しなかつたことを誇りに思っているようだった。リスボンでは天気も良く、現地でバカリャウと呼ばれる鱈のコロッケや、ベレン洋菓子店のパステル・デ・ナタ (エッグタルト) などを堪能した。

しかしながら、この旅行の一番の驚きは、マンチェスター空港の入管の変化であった。ガイドブックなどには、イギリスの入管は厳しく、係官から滞在目的や期間などを詳しく聞かれると書いてある。実際、3月末に入国した際は、入国カードの記入もあったし、言われるほどではないが確かに係官による面接もあった。今回、リスボンからの便が着陸して入管へ向かうと、入国カードが廃止されただけでなく、日本人はイギリス人と同じゲートに行くようになっており、当然面接はなく、パスポートのスキャンとカメラの方を見るだけであった。

この場面をもう少し正確に記述すると、入管のゲートは2つに分かれ、一方はUK市民および「7カ国」、他方は「その他」である。「7カ国」とは、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、日本と韓国であった。これが意味するのは、フランス人やドイツ人などのEU市民は「その他」のゲートに行くということである。そしてこの時「その他」のゲートは非常に混んでいた。これにはかなり驚かされた。マンチェスターの入管が、まるでブレグジットを先取りしているかのように見えた。早速ハダーズフィールド大学に戻ったときに、知人たちに、この7カ国を当てるクイズを出してみた。シンガポールまでは当てるが、その後の2国を当てた人は誰一人いなかった。

6月9日、ハダーズフィールド大学ホロコースト資料・学習センターで開催された、生存者による講演会に行った。このセンターは数年前に設立されたものである。83歳の老婦人が語るその人生の歩みは過酷なものであった。2歳の時に、路上での暴力により父親を亡くした。その後、母親がイギリスへの亡命を申請したが、認められたのは母親のみで、4歳の彼女にはビザが下りなかった。彼女はノルウェーの養父母に短い間預けられ、6歳の時、周りの大人に助けられながらも一人でイギリスの母の元へ移動した。再婚した母と義父との生活は辛いものだった。子どもの頃離ればなれになった兄と再会したのはごく最近であったが、母親とともに過ごせなかった兄は自分を羨んでいるようだった。数年前にドイツの中学校から招待を受けて、話をする機会があった。生徒から「母国に帰ってどうですか？」と聞かれて、「私の母国はドイツではありません。イギリスです。」と答えたそうだ。

6月中旬パドヴァ Padova とアッシジ Assisi を中心にイタリアを訪問した。聖アントニオ San Antonio、聖フランチェスコ San Francesco や聖キアラ Santa Chiara の辿った道を歩く旅であった。聖アントニオは先に訪れたポルトガルのリスボン出身で、イタリアのパドヴァで活動したカトリックの聖人である。6月13日はその命日で、パドヴァでは祝日になっている。まさにその祝日にパドヴァの聖堂を訪れたのであったが、近郊からも大勢の人々が集まり、晴れやかな祝祭の雰囲気街中に溢れていた。「自由」と「平等」は、キリスト教に起源を持ちつつも、シティズンシップの権利として、ルネサンス以降徐々に人々のものとなったので

あるが、それに先だち「隣人愛」を勧めたのが、13世紀初頭のフランチェスコ会であった。そしてそれは今、再び振り返られるべき価値の1つなのかも知れない。

(アッシジのサンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂)



イタリアからイギリスに戻った際、入管のイギリス市民及び「7カ国」の掲示は、再び変更されていた。今度はイギリス市民及び「12カ国」とされ、その先頭にEUの国旗が表示されていた。入管によるブレグジットのフライングは、このように修正されることとなった。今度はこちらのゲートの方が長い列を作っていた。

7月7日、友人のアンディに誘われてマンチェスターのブリッジ・ウォーター・ホールにコンサート「金床ーピータールーの哀歌 The Anvil - An elegy for Peterloo」を聴きに行った。「ピータールーの虐殺 The Peterloo Massacre」200年のメモリアルコンサートで、そのために作曲された新作をBBC管弦楽団、BBC合唱団、ハレ合唱団他が演奏した。「ピータールーの虐殺」とは、1819年、マンチェスターで普通選挙法を求めてデモを行っていた民衆に対して、警官隊が弾圧を行い、18名の死者が出た事件である。マンチェスターの街角では、風刺芝居をするグループや、自由、平等、正義を求める若者たちのシュプレヒコールが行

われていた。

（7月7日、マンチェスターの街角にて）



夏のある朝、相変わらず曇り空であったが、窓の外から叫び声のような鳥の鳴き声が聞こえてきた。見ると、マグパイの巣の近くの枝に、ひと回り大きな黒いカラスがいた。カラスは動かず、じっとマグパイの巣を狙っているようだった。そのカラスをめがけて、2羽のマグパイが声を上げながら脇をかすめ飛んでいる。しかし凶々しいカラスは逃げる様子を見せない。そのうち、マグパイは仲間を呼んだのであろう、4羽となって、カラスを威嚇した。カラスは諦めたのか、いつの間にかその姿を消した。マグパイの巣の中には雛がいたのかも知れない。雛の姿を見ることは一度もなかった。この時は、ホッとしたものだった。

イギリスは、雲が美しい。晴れた日には、ときどき空に浮かぶ雲を見ていた。それは絵に描いたような雲のかたちをしているからだけではない。低層の雲は日本より一層低く、高層の雲は一層高いところにある。そしてその間に幾層もの雲が重なっている。重なり合った雲は、空をより立体的に見せている。夏も終わりに近づき、9月には日本に帰国することを思い、雲を見ながら名残惜しさを感じた。

イギリスに毎年のように来るようになって、イギリス人を一くくりにして一般化できないにもかかわらず、少なくとも自分が身近に接している人々に、どこか私たち日本人とは違う、共通した何かがあるとも感じている。私には、彼らが「私は今、幸せだろうか？」と、いつも静かに自問自答しているように見える。もしその答えが「No」であったとすると、その原因をつきとめようとし、それが見つかったときは、躊躇なくそれを変えようとする。

もう一つは、「大きな幸せは自分一人で手に入れることはできない」という信念をもっているように見える。よく「優先順位の中で on the list」という言葉が使われるが、「自分が幸せであるために大事なことは何か」を考えることは彼らにとって全く習慣的であり、無自覚なくらいである。そのリストがどのようなものであるかは、もちろん一人一人の自由である。金儲けをすること、高い地位を手に入れることや高価なものを手に入れることが、リストの上位に来る人もいるかもしれない。しかしながら多くの人々は、自分が周囲の人と良い関係を築けていること、そして何らかの形で社会に貢献できていることを実感できることの方が、結局はより「大きな幸せ」を自分にもたらすと信じているように見える。「大きな幸せ」と「小さな幸せ」を天秤に掛けるといって、自己犠牲を尊ぶ日本ではいかにも打算的に聞こえるかもしれないが、行動として表に現れた部分では、彼らは日本人と同じように自己犠牲的である。このような感覚が、イギリス人のものなのか、もっと狭く北イングランド人のものなのか、あるいはもっと広くヨーロッパ人のものなのか、そこのところはまだ分からない。

最後に、今回の渡英の研究課題と研究活動の概要を、少し長くなるが、提出した報告書の文章の一部を抜粋し以下に引用する。

“ヨーロッパにおいて、帰属意識の多重性、言い換えると多重アイデンティティすなわちナショナル・アイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティの共存は、進化しつつあるものと考えられてきた。しかしながら近年イギリスでは、中東情勢の不安定化による難民及び移民の流入およびEUの東ヨーロッパへの拡大による労働者の流入が、国民の雇用と収入を不安定化させているという受け止め方が広がりつつあり、こうした問題を積極的に論じる極右政党が台頭し、ヨーロッパ・アイデンティティに対する疑念がもたらされてきた。2016年に行われたEU離脱を問う国民投票では僅差で離脱が残留を上回り、いわゆるブレグジットが決まった。

ギフォード教授は、2008年にその著書『イギリスにおけるヨーロッパ懐疑主義の形成 The Making of Eurosceptic Britain』（邦訳なし）で、上のような流れを予見し、その分析を行った。グローバル経済の進行は、イギリスにおいても、雇用、家族、地域社会などに不安定化をもたらしている。20世紀末のイギリスにおけるシティズンシップの概念は、1998年クリック・レポ

ートに示されたように、多文化性と寛容を基調としたものであった。しかしながら、グローバル経済の進行は、それに対する疑念をもたらしている。

こうした状況を捉えるための枠組みを設定する試みとして、ギフォード教授、マイコック教授と私は、2013年に共著論文「後期近代における市民形成—日本とイギリスにおける若者の比較 *Becoming Citizens in late modernity : a globalnational comparison of young people in Japan and the UK*」を發表した。この論文は、従来のシティズンシップ論が「市民であること *being citizen*」に焦点を当てていたのに対して、後期近代においてそれは「市民となること *becoming citizen*」に、より焦点を当てるべきであると論じたものである。この論文はその後様々な研究者によって引用されるようになった。

今回の渡英では、若者が「市民となる」ための諸条件をさらに吟味したいと考えた。その文脈において特に「メリトクラシー *meritocracy*」の位置づけについて考察したいと考えた。メリトクラシーとは、イギリスの社会学者マイケル・ヤング *Michael Young* の造語であり、日本では「業績主義」と訳され、社会学では広く用いられる用語である。

最初の発見は、意外なところで見つかった。メリトクラシーという言葉がイギリス発祥であるため、私はこの用語はイギリスでも日本と同じように用いられているものと思い込んでいたが、それは間違いであった。メリトクラシーは、イギリスではマイケル・ヤングが描いたディストピアそのもののイメージで、日本の社会学会におけるような中立的な意味で用いられることはほとんどないということであった。

私としては、メリトクラシーの概念を前提として、その条件を考えようとしていたところであったが、そう簡単ではなかったということだ。それは言い換えると「頑張って成果を得た者が報われる社会」のイメージを共有できることが「市民になること」の条件として重要ではないかという仮説であったが、そのような「社会」は、イギリスではメリトクラシーの用語によっては一般に表現されていないということであった。そこで、メリトクラシーの概念について、共同研究者間でしばらく議論を続けた。

参照した論文は、ハンガリーの教育心理学者フューロップによる「共同的で競争的な市民、それはどういう意味か？ *Fulop, M. (2013) The Cooperative Competitive Citizen: What does it take?*」と社会学者のロックウッドによる「市民統合と階級配置 *Lockwood, D. (2010) Civic Integration and Class Formation*」である。前者は、「共同的」であることに比べて「競争的」であることは、シティズンシップ論の中でしばしば否定的に扱われてきたが、それを見直そうという試みである。後者は「理想的な市民」という概念をフィルターにして、人々が自らの立ち位置を計っているのではないかという論で

ある。こうした議論を読み合いながら、メリトクラシーの概念について再検討することに意義があるだろうという共通認識に至ることができた。

5ヶ月という短い期間であったが、2人の共同研究者と顔を合わせてゆっくり議論する機会が与えられたことは、電子メールだけでのやりとりでは得られない微妙なニュアンスを吟味することができた点で、大変有意義であった。

今後の課題として、日本の社会学、教育社会学でメリトクラシーの概念がどのように使われてきたかについて、イギリスではあまり知られていないように思われた。これを紹介するという点が浮かび上がったので、それを含め次の4点について、引き続き議論していくこととした。

1) 上記課題に関して、イギリスと日本の共同研究を支援する科研費ないし基金を探ること。2) この研究を進めるに当たって協力する団体はどれかを探ること。(イギリスではユーガヴ Yougov であり、日本でこれに相当する団体はどれかを探し、協力を打診すること。3) 学術的な研究であると同時に何らかの形で政策決定に影響を与える研究を目指すとするならば、どのような団体と連携することが可能であるかを探ること。4) 日本における関連諸研究の英文抄訳を作成し、イギリスのそれとの比較を行うこと。”

9月、アパートを去る日も雨降りだった。窓の外にはもうマグパイの姿は見られず、巣だけが枝の間に残されていた。

(むらかみ じゅんいち・教授)